北海道の学校図書館

発　行　北海道学校図書館協会
会　長　新津　智哉
事務局長　山口　朱美
https://hokkaido.sla.gr.jp
印刷所　㈱有伸商会
ＴＥＬ（011）814-6211

2024年度　青少年読書感想文全道コンクール　入賞者決定!!

今年も全道から、たくさんの素晴らしい作品が集まりました。第１次、第２次審査を経て、入賞者が決定しました。12月８日（日）に晴れの表彰式が行われます。入賞者の皆さん、おめでとうございます。

第70回　青少年読書感想文全道コンクール
第50回　北海道指定図書読書感想文コンクール　特別賞入賞者一覧

北海道知事賞	＊「りんごかもしれない」を読んで	小樽市桜小	３年	北川　汐織
	＊こだわりの先にあるもの	岩見沢市明成中	１年	藤枝　皇王
	＊「美味しい」に気持ちを込めて	遺愛女子高	１年	齊藤　心音
北海道議会議長賞	＊「はやくでてきてごめんね」	室蘭市旭ヶ丘小	１年	関東　愛梨
	・ゆめは命をすくうこと	森町森小	３年	今井　愛心
	＊夜空に輝くお月さま	苫小牧市拓勇小	５年	中　拓生
	＊夢を決めるために	岩見沢市光陵中	１年	吉成　夏槻
	＊今を生きていくこと	遺愛女子高	１年	佐藤　咲弥
北海道教育委員会教育長賞	・本とうの大ものになるために	帯広市つつじが丘小	２年	古田　葵唯
	・言葉の力	室蘭市旭ヶ丘小	４年	佐藤　杏奈
	＊人として生き、人権を守る	岩見沢市岩見沢小	６年	榊　怜央
	・笑顔を夢見て	札幌市信濃中	３年	坂本　温音
	・『「社会を変える」を仕事にする』を読んで	遺愛女子高	１年	村井　暖奈
北海道学校図書館協会長賞	・「ごめんね　でてこい」を読んで	旭川市旭川第三小	２年	三浦　彩葉
	＊プラスチックがぼくを変えた	旭川市神楽小	４年	柚木晃太郎
	・「給食が教えてくれたこと」を読んで	札幌市桑園小	６年	宮﨑　爽
	・チャーリイと兄弟から学んだこと	教育大学附属旭川中	３年	佐藤　開生
	・『戸惑いの中にあった光』	帯広柏葉高	１年	横澤　紗映
毎日新聞社賞	・ごめんねとのたたかい	名寄市名寄南小	２年	松前孝志郎
	・「自分を信じるための努力」	岩見沢市美園小	４年	砂沢　律
	・僕にできる恩返し	札幌市厚別北小	６年	佐々木正明
	・私たちの愛した数式	苫小牧立明野中	１年	石村　明紗
	・『夜と霧』を読んで	遺愛女子高	１年	山村　佳子
北海道読書推進運動協議会長賞	＊いのちをつかむ	苫小牧市拓勇小	２年	中　耕生
	・発達障害の人が見ている世界	小樽市北陵中	３年	前坂　明花
	・受け継がなければならないこと	函館西高	１年	齋藤　葵
北海道青少年育成協会長賞	・帆を出せ、言葉の海へ	札幌市開成小	６年	小野芽衣子
	・「自分とか、ないから」を読んで	小樽市松ヶ枝中	１年	水谷内梨平
北海道ＰＴＡ連合会長賞	・無限の可能性	旭川市緑が丘小	５年	髙木　立誠
北海道高等学校ＰＴＡ連合会長賞	・「黒い雨」を読んで	帯広柏葉高	１年	槇　優奈
北海道教育振興会長賞	・「すきなこと　にがてなこと」をよんで	函館市北美原小	２年	澤田　実來
	・「海がどんどんこわれていく」を読んで	函館市北美原小	４年	荒川　雫
	・私たちの道	滝川市東小	６年	川村　彩菜
	・「夢をかなえるゾウ」を読んで	岩見沢立明成中	２年	福田　百栞
	・「命をいただく」ということ	函館白百合学園高	３年	小川　清花
北海道教育文化協会賞	・苦海浄土	藤女子中	２年	前田　海音
	・青春の意義	帯広緑陽高	３年	兒玉　紗那
はるにれ賞	・どろくさく夢にチャレンジ	小樽市朝里小	４年	熊川　瑞人
教育出版社賞	・「私にできる心の癒しかた」	恵庭市恵庭小	６年	武田　紗彩
文研出版社賞	・ぼくの　ごめんね	札幌市桑園小	１年	髙田　惺也
北海道図書教材協会賞	・たまれ、たまれ、音の情報	苫小牧市拓進小	３年	田野　栞絆
図書館ネットワーク賞	・プラスチックストローいりませんゲン	苫小牧市拓進小	３年	田野　心絆
北海教育評論社賞	・新聞に込められた思い	旭川市神楽小	６年	柚木　紗南
光陽社賞	・フェイクニュースから学んだこと	札幌市幌北小	２年	重木　美智
光村図書出版社賞	・わたしの小さな一歩	札幌市平岡公園小	３年	安達　梨花
学校賞	小学校の部	**苫小牧市立拓勇小学校**		
	中学校の部	**岩見沢市立明成中学校**		
	高等学校の部	**遺愛女子高等学校**		

＊は、全国コンクール応募作品です。（各部から代表～自由１点・課題１点）

北海道知事賞

「りんごかもしれない」を読んで

小樽市立桜小学校　３年　北　川　汐　織

表紙にかかれている絵にきょうみがわき、「この“りんご”って、いったい何なのだろう」と思い、私はこの本を読み始めました。

さいしょにひかれた所は、げんじつにはそんざいしないようないろいろな形や、まるで生きもののようにかかれている“りんご”の絵でした。私の知っているりんごは、どれもまるい形のはずなのに「どうして、この本ではこんな形にかいているのだろう」と、ふしぎに思いました。そして、くりかえして読むほどに「なるほど。こういう“りんご”の形や、ものの見方もあるんだなぁ」と感じて、どんどんおもしろくなりました。

一番心にのこっているのは、「もしかしたら、兄弟がたくさんいるのかもしれない」という、４６個のりんごの絵がかかれているところです。私には、弟が一人います。弟は、私が遊んでいても宿題をしていても、そんなことはおかまいなしにあまえてきます。それはそれでうれしいのですが、ときどき「うっとうしいなぁ」と思うこともあり、そんなときには「あまえられるのではなく、あまえてみたいな」と強く思うのです。でも、私が何かいやなことがあったときや悲しい気持ちでいる時には、いつの間にか弟がそばにいます。

そして「お姉ちゃん、元気出してね。」と声をかけてくれると、なぜか少しずつ元気がわいてくるような気がします。そんなとき私は、「この子が弟でよかったなぁ。」と思います。

だけど、同じ姉弟でも私とちがった考えの人も、もしかしたらいるのかもしれません。

そして何回も読むうちに、この本には「～かもしれない」という言葉がくり返し使われていることに気づきました。そこから“りんご”にたとえて、一つの物事でも見方をかえるといろいろな考え方ができるという、作者さんの気持ちがこの本にはつまっているのではと考えるようになりました。一人一人にいろいろなものの見方や考え方があって、それがあるからこそ、トラブルにあったときやかべにぶつかったときに、かいけつする方法を“考える”ことができるのだと感じました。

目には見えないことだけど“考える”ことは大切だと思います。何かぎもんがあるとき、“考える”ことができないと、そのぎもんは大きくふくらみ、答えが見つからず、かいけつできなくなるからです。答えが見つからないと、そこに立ち止まったまま、前にすすめなくなってしまいます。だから、ひとつの考え方にこだわらず、いろいろと見方をかえて、たくさん“考える”ことが大切なのだと、私はこの本を読んで知ることができました。

こんな風に考えると、もしかしたら、私がいま書いているこの文章も、読書感想文ではないのかもしれません。でも、一人一人のものの考え方もその答えも、一つではありません。迷ったときにはたくさんの“りんご”の中からえらぶことができるのだということを、この本を読んで学ぶことができました。この本に出会えて、本当によかったと思います。

『りんごかもしれない』
ヨシタケ　シンスケ／作
（ブロンズ新社　2013.4刊）

北海道知事賞

こだわりの先にあるもの

岩見沢市立明成中学校　1年　藤　枝　皇　王

今年の夏休みは、いつもの夏休みとは少し違う。祖父の家に遊びに行くのが毎年恒例の楽しみだが、今年は気が重いのだ。

「おじいちゃん、漁師辞めちゃうみたい。もう身体がしんどいのかもね……。」

母が寂しそうに言っていたのが春。それから初めて祖父に会いに行く。一体何があったのだろう。あんなに仕事が大好きだったのに。

モヤモヤした気持ちの僕は、祖父の家までの長い移動時間にこの本を読んだ。ノクツドウライオウ。呪文か暗号か。今の僕の気持ちはますますモヤっとしたが、そこには僕と同じように祖父を慕う主人公の夏希がいた。

ノクツドウライオウ。右から読むと靴の往来堂と書かれている古い看板を掲げた、老舗靴店の四代目、夏希の祖父マエストロは、オーダーメイドシューズ職人として強いこだわりがある人だ。こだわるというと、必要以上に気にする、難癖をつけるなど、良くないイメージもあるが、マエストロのこだわりは、妥協を許さず、とことん追求した信念のあるこだわりである。マエストロと全く同じこだわりを持った僕の祖父は、三代続くホタテ養殖業を営む漁師だ。ガッシリとした身体、ゴツゴツした大きな手、七十歳を過ぎても夜中の一時から働いているような超人だ。そんな祖父は、僕が小学校に入学する前、

「ランドセルを買ったから、おじいちゃんの任務完了。仕事も引退かなぁ。」

と言っていたが、それから何年経っても変わらずに仕事を続けていた。急に辞めてしまうなんて、まさに青天の霹靂だった。

「どうして漁師辞めちゃったの。体の調子悪いの。仕事、嫌いになっちゃったの。」

僕は会ってすぐこう聞いてしまった。祖父はいつもの優しい表情で、

「仕事が大好きなうちに辞めるんだよ。仕事が苦になったり、仕事を憎んだりしたくないんだ。まだまだやれるけどな。今辞めるのがちょうどいいんだよ。」

そう言い切ったのだ。そんな祖父から、今まで続けてきた大好きな仕事への誇りと強い覚悟を感じ、僕のモヤモヤした気持ちはスーッと軽くなっていった。

祖父は養殖業をするうえで、一枚一枚のホタテを大切に、より良い品質を追求することにこだわっていた。そしてそのこだわりの先にあるものは、美味しく安心安全なものを食べて頂きたいというお客様への「思いやり」だった。またマエストロは、一人一人の歩き方のクセや足の形にあった靴作り、品質にこだわってきた。十年二十年と履いて頂ける靴を届けたいというこだわりの先にあるもの、それもお客様への「思いやり」だったのだ。

僕は祖父やマエストロのように、こだわりを持った大人になれるのだろうか。僕には小さい頃から、プロサッカー選手になりたいという夢がある。普段は慎重派で決断力の無い僕が、サッカーをしている時だけは大胆で自信に満ち溢れた自分に変わる。貴重な時間だ。だが、もう一つ夢がある。それは理学療法士になること。父のサッカー人生が怪我の影響で幕を閉じてしまったため、誰かのそのような瞬間に寄り添ってサポートできる理学療法士になりたいのだ。夢が二つなんて笑われるかもしれない。こだわりが無いのかもしれない。しかし、物語の中で職人を夢見る宗太の夏希にかけた言葉が、僕の胸に刺さった。

「夏希のシューズデザイナーになりたい夢も四代続くオーダーメイドシューズ店を守ることも、どちらもやれる。どちらかを捨てる必要なんてない。伝統を大切にしながら新しいお店を作るんだ。」

そうか。僕の夢も両方叶えられる。どちらも目指していいんだ。サッカー選手の現役生活が終わってから、理学療法士の道に専念することもできる。社会人チームでサッカーをしながら理学療法士として働く、二足の草鞋を履いた生活にも挑戦してみたい。どちらかを諦める必要なんてない。どちらも妥協せず追求する、こだわりを。将来に不安ばかり抱えていた夏希も僕も、宗太の「思いやり」に救われたのだ。

この本に出会わなければ、日常の小さな思いやりに気付くことはできなかっただろう。妹が描いてくれた僕の似顔絵には「さかーがんばてね」とかわいいメッセージが添えられていた。僕が公園に忘れた帽子を届けてくれた友達、近所のおじさんが無農薬で育ててくれたホウレン草、母が作ってくれた大好物の野菜カレー。僕の周りは、こんなにもたくさんの思いやりで溢れていたのだ。

どんなに時代が移り変わっても、人間関係が希薄な社会になってしまっても、こだわりのあるものやこだわりのある人に触れ、その先にある思いやりを見つけられる自分でありたい。そして、僕もいつか信念のあるこだわりと、その先にある思いやりを、誰かにプレゼントしたい。僕の祖父や、ノクツドウライオウのマエストロのように。

『ノクツドウライオウ
靴ノ往来堂』
佐藤　まどか／著
（あすなろ書房　2023.4刊）

北海道知事賞

「美味しい」に気持ちを込めて

遺愛女子高等学校　1年　齊　藤　心　音

私には一日のうち、三度楽しみな時間がある。それは、朝・昼・晩の食事の時間だ。たとえ嫌なことがあっても、美味しいものを食べている間はそのことを忘れられる。そして何より、食事は私を幸せな気分にしてくれる。だから私は食べることが好きだ。この本を選んだ一番の理由もこれだ。「あつあつを召し上がれ」。日本人は食べ物が温かいかどうかを重要視すると言うけれど、私はこの「あつあつ」というワードを一目見て、日本人の本能に従うままにこの本を手に取った。そのようにして出会ったこの一冊を読み進めるうちに、私はもっと食事が好きになると同時に食事が人々にとってどのような存在であるかを改めて認識させられたのだ。

本書には七つの「食」をテーマにした短編作品が収められている。読んでいてまず私が目を見張ったのは、小川糸先生の描く食事シーンである。「アラびきの肉それぞれに濃厚な肉汁がぎゅっと詰まって、口の中で爆竹のように炸裂する。」これはある女性があつあつのしゅうまいを口に含んだ際の感想である。その後に「ぶたばら飯」なるものを食べた際には、「もう感想を言葉にする余裕すらなく、とにかく目の前の食べ物と早く一緒になりたいようなもどかしい気持ちで、何度も何度も白いレンゲを口に運ぶ。（中略）食べ物というより、芸術作品を口に含んでいるようだった。」と表現している。私たちが美味しいものを食べてただ「美味しい」と言ったり、テレビでタレントが「甘～い！」等と述べていることはよくあるが、小川先生のそれはまったく別次元のようだった。読み手に食べ物が目の前にある所から、口に含み、味わい、飲み込む所までをとても詳細にかつ魅力的に想像させるのだ。私は小川先生の卓越したその文章力と語彙力に、思わず感服してしまった。

小川先生の素晴らしい文章力は、食事のシーンのみならず、作品全体を通した人々と食の深い関係性の表現にも表れている。この作品では、それぞれの短編ごとにある人が他の人に食べ物を食べさせてあげる場面が多く見られる。ある女の子は認知症の「バーバ」に富士山みたいなかき氷を、またある母親は娘を通じて夫に毎日欠かさずおみそ汁を食べさせてあげようとする。私はそれらの話を読み、人は自分の抱える気持ちや思い出という「自分自身」を相手に伝える役割を食事に委ねているのだなと感じた。ある人から聞いた話で、美味しいものを食べた時に、それを食べさせてあげたいと思い浮かぶ相手は、その人にとって大切な存在である証拠だという。その話を聞いた時、またこの小説を読んで思い出したことは、私の母のことだった。母は岩手県の漁村出身で、母の母親、私の祖母にあたる人は、よくいくらの醤油漬けや魚介料理を作っていたそうだ。その為、母は度々「うちのお母さんの料理はそれはもう絶品なんだよ。一回は食べさせてあげたかったなあ。」と私たち家族に言っていた。母は私たちに祖母の料理の話をすることで、亡き祖母の存在や思い出を伝えようとしているのと同時に、その味を食べさせてあげたいくらい私たちが大切な存在であることを伝えたいのではないかと思った。この本の登場人物たちも、自分の気持ちを食を通じて伝えようとしている。女の子はバーバに一緒にかき氷を食べたことを思い出してほしくて、母親は自分が亡き後もプロポーズの時の約束を守り続けて。そのような、ある一種の愛情のコミュニケーションという重要な役目を、食事は果たしているのではないかと改めて感じる機会となった。

こうしてタイトルの「あつあつを召し上がれ」という言葉に立ち返ってみると、作者の小川先生がこの短い一言に込めた意味がわかるような気がした。相手にあつあつの一番美味しい状態を味わってほしいという人から人へかけられる愛情。また、「あつあつ」に込められた、小川先生から私たち読者への、温かい人と人との繋がりをこの本を通じて「召し上がれ」というメッセージ。私には、小川先生が読者に向けてそう語りかけているように感じられた気がするのだ。

私事ではあるが、最近のマイブームは料理である。といっても作るのは自分の朝食だけだし、スープ等の簡単なレシピやお菓子作りしかまだ習得していない。けれど、いつか私の作った料理を大切な家族や、食べてもらいたい、食べさせてあげたいと思うような相手ができたら、丁寧に、愛情を込めて作ったできたての一番美味しい状態で、この一言を添えて振る舞いたいと思う。

「あつあつを召し上がれ。」

まるで魔法のようなこの一言を、いつか伝えられる相手ができればいいな、と願うと共に、料理のウデをその時までに磨いておこうと私は密かに心に誓った。

『あつあつを召し上がれ』
小川　糸／著
（新潮文庫　2014.5刊）

北海道議会議長賞

「はやくでてきてごめんね」

室蘭市立旭ヶ丘小学校　1年　関　東　愛　梨

はなちゃんおばあちゃんとわたしのばあばはそっくりだよ。はなちゃんおばあちゃんは「たべたら、すぐはをみがくんだよ。」
「でんきをつけて、よみなさい。」
わたしのばあばは、
「りーちゃん、ちかくでテレビみちゃだめ。」
「おちゃわんをちゃんともってたべないと、ワンちゃんみたいよ。」
はなちゃんとわたしがしらないことをおしえてくれるの。わかってるけど、うるさいんだもん。だからよくけんかをしちゃう。
はなちゃんもわたしも、ばあばがとおくにすんでいるから、あまりあえないの。あったときは、「ばあばー」ってとびついてぎゅっとしてはなさないよ。いもうととばあばをとりあいっこして、けんかになるから、ばあばは、いつもまんなかにすわるの。ゆびあそびやむかしばなしもおしえてくれる。ももたろさんは三ばんまでうたえちゃうよ。
こんなに大すきなばあばだけど、けんかをすると、はなちゃんとおなじで「ごめんね」がすぐにいえないの。ばいばいするときは、なみだがポロポロでちゃうのに。いえないの。
はなちゃんはおばあちゃんがびょうきになったとき、きっとはやくいってあやまりたかったよね。やっぱりあやまれなかった。だってわたしもむねがドクンドクンしたもの。
でも、はなちゃんは、すごーくつよいゆうきをだした。わたしもドキドキしながら、はなちゃん、がんばれっておうえんしたよ。
「ごめんね。おばあちゃん。」
やったー。はなちゃん。すごいなあ、ごめんねがでたー。パチパチ、はくしゅしたよ。
わたしもなんかばあばにあいたくなったよ。もし、また、ばあばとけんかしたら、
「ばあばごめんね。」
ってあやまれるように、こんどは、はなちゃんがわたしをおうえんしてね。「ごめんね」がはやくでてくるように。だって、はなちゃんもわたしもばあばが大すきだからね。

『ごめんね　でてこい』
ささき　みお／作・絵
（文研出版　2023.6刊）

総　　評

審査委員長　北海道学校図書館協会監査　矢田　春義
（市立札幌新川高等学校校長）

本年度の第70回青少年読書感想文全道コンクール及び第50回北海道指定図書読書感想文コンクールには、昨年度より減少したものの586点の作品が寄せられました。応募してくれた児童生徒の皆さんはもちろん、日頃から図書活動や読書感想文の取組を推進されている教職員とご支援いただいている保護者の皆さんには、敬意と感謝を申し上げる次第です。
本コンクールでは、毎年小学校低・中・高学年、中学校及び高等学校の５部門において総勢21名の委員により厳正に審査を行っています。私たちが手にする作品は書き手の思いがずっしりと詰まっていることから、限られた期間ではありますが熟考を重ね、丁寧に審査にあたっています。
各部門の作品から見えてくるのが、子どもたちの確かな成長の様子です。小学校低学年・中学年の部門では、自分の知らない世界に触れたことによる驚きや知ることの喜びが感性豊かに描かれた作品が見られます。思わぬ表現に出会うこともあり、ハッとさせられることもあります。そして小学校高学年、中学校の部門になると、視野が広がりその眼は広く社会に向けられていきます。語彙も増え批判的に考察する力が身につき、読みごたえのある作品へと推移します。最後に高校生部門ともなると、自身の人格や人生と向き合うようになり、深い思考の下、不安や葛藤と対峙する様が描かれます。今年の審査でも、このような印象を強く受けることとなりました。
審査で目を引いたのが、読書によって得られた学びに気づき、それに自分なりの考えを重ねている作品。さらには感想や私見を整理し、構成を工夫しながら自分なりの結論を導き出している作品です。中には言葉が使いこなせず、分かりづらい文章も見受けられましたが、全体的に推敲が十分なされていると感じました。
これからも児童生徒の皆さんが多くの良書と出会うことで、心をより豊かにして充実した毎日を送ってほしいと思っています。そのために「読書って面白い」という気持ちを持ち続けてくれることを願っています。

北海道議会議長賞

夜空に輝くお月さま

苫小牧市立拓勇小学校　５年　中　拓　生

ぼくには帰る家がある。ぼくがドキドキしながら宿泊学習に行っても、弟が入院し一人で祖母の家へ預けられても、帰る家はちゃんとここにある。それは当たり前のことだけれど、ウィリアムたち三人はそうではない。つまり、帰るところがない。帰るところがないとは、どんなに淋しく心細いことだろうか。

正直に言うと、ぼくは自分の家があまり好きではない。弟はすぐにちょっかいをかけてくるし、三日に一回くらいはケンカをする。母には何をする時にも「早くしなさい」と怒られる。ゆっくりのんびり思う存分読書タイム、なんて夢のまた夢だ。それでも、家に帰ってくるとやっぱりとてもほっとする。そして、とても安心する。

ウィリアムたち兄妹には、そういう場所がなくなってしまった。両親は小さい時に死んでしまったし、親の代わりに世話をしてくれていたおばあちゃんも死んでしまった。だから後見人探しのために、学童疎開に行くことになった。一人ぼっちじゃない、兄妹三人一緒だ。三人いれば、どんなに心強いことだろうか。ぼくも、ちょっかいをかけてくる弟でも、一緒にいてくれた方が心強いと思うことが多々ある。一人では不安な時に、弟がいるだけで安心することもある。助けられることもある。人前に出る時は、兄としてしっかりしなくてはとも思う。淋しくても辛くても、泣くに泣けなくなる時もある。

人間にとっての一番小さな集団は家族だ。一番関わりが深いのも家族だ。更に言えば、子どもへの影響力が一番強いのも家族だと思う。そんな家族選びだから、失敗できないとウィリアムは言う。もっともだ。家族を選ぶことはできない、選ぶことなどないと思っていたけれど、まさか肉親の死という理由で新たな家族を探し、選ぶことになるなんてびっくりだ。

兄妹たちは自分たちのことを「夜空に輝くお月さまのようだ」と言ってくれる人に、親代わりの後見人になってもらいたいと言う。逆じゃないか、帰るところがなくなって途方に暮れている兄妹にとって、「夜空に輝くお月さまのような人に、後見人になってもらいたい」ではないだろうかと思いながら、ぼくは本を読み進めた。

疎開先で兄妹たちは辛い目に合う。その時に心の支えになったのが図書館だった。ぼくにとっても、図書館と本屋は心の支えだ。本を読むことで新しい知識を得られるだけでなく、気持ちの切り替えもできる。本の世界に入り込むことで、嫌なことも辛かったことも忘れることができる。きっと、兄妹たちも同じ気持ちだったのではないだろうか。その図書館で、司書のミュラーさんが「三人は、暗闇を照らすお月さまのようだ」と言ってくれた。自分たちを大切に思ってくれる、必要としてくれる人を見つけることができたのだ。存在そのものが、誰かの心の支えになる、そんなすてきな存在にぼくもなりたい。

『図書館がくれた宝物』
ケイト・アルバス／作
櫛田　理絵／訳
（徳間書店　2023.7刊）

2024年度（令和6年度）北海道の先生がおすすめする本

北海道指定図書

小学校低学年の部（1・2年）

あおを はっけんした ちいさな ヤン
みならい えかきの おはなし
ジャン＝リュック・アングルベール／作　はしづめ ちよこ／訳
イマジネイション・プラス　1,870円
昔青は貴重な絵の具でした。偶然簡単に作る方法が発見され、青は浮世絵等にも使われました。

いつか きっと
アマンダ・ゴーマン／文　クリスチャン・ロビンソン／絵
さくま ゆみこ／訳　あすなろ書房　1,650円
こまったことがあるときどうする？ どうしようもないことあきらめないで…！ ささやかだけど力強い愛と希望の物語。

い え　あるひ せんそうが はじまった
カテリナ・ティホゾーラ／作　オレクサンドル・プローダン／絵
すぎもと えみ／訳　汐文社　1,870円
ぼくはこのいえに、パパとママといぬとすんでいた。でも、あるひ…。ウクライナで続く戦争でいえをうばわれた男の子の物語。

そんなこともしらないの？
パク・ジョンソプ／作　なかやま よしゆき/訳
フレーベル館　1,760円
ウソの情報にだまされてパニックのサカナたちをユーモラスに描き、フェイクニュースに動揺する社会を風刺した絵本。

中学校の部

あした、弁当を作る。
ひこ・田中／著
講談社　1,540円
中学生男子の反抗期を「弁当作り」というユニークな切り口で描いた児童書。ユーモアたっぷりな反抗期の心情は必読です。

夜空にひらく
いとう みく／著　杉山 巧/装画
アリス館　1,760円
暴力事件をおこした円人は、花火師の深見の家で暮らすことに。人の優しさ、あたたかさを知り、居場所を見つけていく。

小学校中学年の部（3・4年）

錦鯉を創る
新潟から 世界へ
松沢 陽士／写真・文　小学館　1,430円
江戸時代に誕生し、今やその美しさで世界中に愛される錦鯉。錦鯉を育み、新品種に挑戦する養鯉場に密着した写真絵本です。

夢への扉を開け！
町田瑠唯
ベースボール・マガジン社／編
ベースボール・マガジン社　1,980円
東京五輪で銀メダルを獲得した女子バスケの立役者・町田瑠唯さんのあゆみを追いました！

じゅげむの夏
最上 一平／作　マメ イケダ／絵
佼成出版社　1,650円
四年生の夏休み、難病を抱える親友のために一致団結した少年たちが、いのちを謳歌する姿をみずみずしく描いた童話。

小学校高学年の部（5・6年）

ぼくはうそをついた
西村 すぐり／作　中島 花野／絵
ポプラ社　1,650円
戦争を、どこか遠い昔の事のように感じていたリョウタ。祖父の話をきっかけに、今も消えない原爆の傷について考えます。

給食が教えてくれたこと
「最高の献立」を作る、ぼくは学校栄養士
松丸　奨／著
くもん出版　1,540円
「最高においしい！」給食を作るため、壁にぶつかりながらも挑戦を続ける現役栄養士の熱血お仕事ノンフィクション。

図書館がくれた宝物
ケイト・アルパス／作　櫛田 理絵／訳
徳間書店　2,090円
第二次大戦下、ロンドンから疎開した両親のいないきょうだいは、親代わりになる人を求め…？ 心あたたまる物語。

北海道の本を読みましょう！

第70回　青少年読書感想文全道コンクール　第50回　北海道指定図書読書感想文コンクール

■主催／北海道学校図書館協会・毎日新聞社北海道支社
■後援／北海道・北海道議会・北海道教育委員会・公益財団法人北海道青少年育成協会　■選定協力／北海道読書推進運動協議会

感想文は夏休み明けに、学校に出してください。詳しくは、「応募のきまり」をご覧ください。　●ホームページ　北海道学校図書館協会　検索

優 秀 賞

小学校（低学年）の部（12名）

作品名	氏名	学校名	学年
もっとしりたい	山本桔平	教育大学附属旭川小	２年
たいせつな家ぞく	渡邊希	岩見沢市岩見沢小	２年
なきむしなっちゃんを読んで	伊藤実来	岩見沢市第一小	２年
ゆうたとぼくのぎん色コイン	長江健仁	岩見沢市南小	２年
なかよくしたいね	四宮颯大	岩見沢市岩見沢小	１年
どうなるの？未来の地きゅう	千秋翔蓮	苫小牧市美園小	２年
大せつなおもいと大じな人	齋藤有由	岩見沢市中央小	１年
すなおにごめんねがいえるように	川邊結彩	旭川市大有小	２年
自分の気もちを力にかえて	山﨑史果	札幌市明園小	２年
おちびさんと小二病	菅原大翔	旭川市啓明小	２年
「楽しむことで できること」	阿部陽仁	教育大学附属函館小	２年
なんどでも、やってみる	山本大起	札幌市ひばりが丘小	１年

小学校（中学年）の部（12名）

作品名	氏名	学校名	学年
ココロ屋	有金空冴	函館市北美原小	３年
日本からおくられたランドセル	中村豪	函館市昭和小	３年
本当の友達とは？	佐藤こころ	室蘭市蘭北小	４年
たくさんのプラスチック	小川結愛	室蘭市蘭北小	４年
戦争と夢	松前ひかり	名寄市名寄南小	４年
さようならプラスチック・ストローを読んで	伊田陽咲	岩見沢市中央小	４年
「音は旅をしている」	粕川夏生	札幌市大谷地小	３年
『私のよい耳』	本間晴華	教育大学附属旭川小	３年
無我夢中～「じゅげむの夏」	茶木彩芭	滝川市東小	４年
「最高の夏休み」	安藤璃	旭川市永山西小	３年
「ラストチャンス」	小林初心	札幌市日新小	４年
友情	丸山蓮	増毛町増毛小	４年

小学校（高学年）の部（12名）

作品名	氏名	学校名	学年
安心出来る居場所	山田唯喜	苫小牧市明野小	５年
ほんとうの意味での「生きること」	阿部心優	余市町大川小	５年
お金は何のためにある？	上杉実日子	別海町別海中央小	６年
苦手な子に出会った時には	森永萌々夏	札幌市北野台小	６年
「ぼくは うそをついた」を読んで	南川麻衣子	音更町下音更小	６年
平和な世界へ	南川安実	室蘭市天神小	６年
「助け合いの連鎖」	中野朔空	函館市青柳小	６年
「みんなに届け、希望の光」～勇気運ぶ新聞	京極大空	苫小牧立拓勇小	６年
『今日の献立』	本間明華	教育大学附属旭川小	６年
最高の献立	窪田こはる	旭川市末広北小	５年
「僕が大切にしたい気持ち」	松田采士	苫小牧市美園小	６年
平和への願い	本村颯汰	旭川市緑新小	５年

中学校の部（15名）

作品名	氏名	学校名	学年
「母の国、父の国」を読んで	川口すな桜	室蘭市港北中	１年
肝心なこと	濱　愛奈	岩見沢市豊中	３年
希望のパレット	小林　凛	岩見沢市清園中	３年
『斜陽』を読んで	岡部菜々実	遺愛女子中	３年
あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。	野口桃佳	遺愛女子中	３年
障がいの壁をこえて	工藤桔伊	苫小牧市沼ノ端中	３年
“今日一日”の積み重ね	外山ひより	登別明日中等教育学校	２回生
「颶風の王」を読み、思うこと	上杉正太郎	別海町別海中央中	３年
支えあって生きていこう	樋口七瀬	美唄市美唄中	２年
『アフリカで、バッグの会社はじめました』を読んで	平松　昊	教育大学附属旭川中	２年
平和のバッグ	寺田智陽	小樽市菁園中	３年
夢への決断	櫻庭唯夏	苫小牧市青翔中	２年
「ノクツドウライオウ」を読んで	山脇一乃	東川町東川中	３年
反抗期って何だろう	小泉真歩	小樽市菁園中	２年
反抗と自立	熊澤陽葵	室蘭市港北中	２年

高等学校の部（15名）

作品名	氏名	学校名	学年
等身大を愛する	伊藤ひばり	士別翔雲高	３年
ひだりポケットの三日月	瀬尾奈名海	遺愛女子高	１年
自分と向き合う	藤田康育	士別翔雲高	２年
「『好き』を力にする～NBAプレーヤーになるために僕が続けてきたこと～」を読んで	福田愛恵	遺愛女子高	１年
足るを知る	馬場栞奈	遺愛女子高	１年
「ありのまま」を受け止める	毛間内晴日	函館白百合学園高	２年
「優等生サバイバル」を読んで	室井珠希	遺愛女子高	１年
不安との向き合い方	松浦未羽	帯広緑陽高	３年
高校生	堀　優介	函館商業高	２年
「乗り越えていく」	加藤　蒼	帯広緑陽高	３年
君たちはどう生きるのか	北見文蘭	函館白百合学園高	１年
私の中の〝野火〟	前田海杜	北嶺高	２年
『女生徒』を読んで	貴田岡寧々	函館商業高	２年
戦国武将と、私をつなぐ	平尾萌花	遺愛女子高	１年
僕は「生きづらい」のか	大山口皓太	足寄高	２年

◆感想文集『北海道の読書』（令和６年度版）の普及を！

第70回青少年読書感想文全道コンクール入賞作品集

○小学校・中学校・高等学校上位入賞者の作品を掲載！（価格税込：1,500円）

【申し込み・問い合わせ】

北海道学校図書館ＨＰ＞読書感想文コンクール＞北海道の読書＞学校宛・個人

札幌市立平岡小学校　教諭　佐藤秀則　ＦＡＸ　011－883－9419

■12月28日までに「北海道学校図書館協会文集会計」宛に、申込･送金をお願いします。
１月下旬にお届けを予定しています。詳しくは、ホームページをご覧ください。
締切を過ぎての申込の場合、２月下旬のお届けとなります。

優 良 賞

小学校（低学年）の部

帯広市豊成小	２年	兒玉　陽希
小樽市稲穂小	２年	村岡　　樹
帯広市帯広小	２年	長尾　稟和
旭川市緑新小	１年	黒田　真央
岩見沢市岩見沢小	１年	林　穂の果
岩見沢市岩見沢小	２年	齋藤　妃那
苫小牧市ウトナイ小	２年	大田　英祐
室蘭市八丁平小	２年	平泉　結咲
室蘭市海陽小	２年	大類　遥陽
苫小牧市ウトナイ小	１年	三上　雄大
函館市中島小	２年	大和田悠斗
留萌市留萌小	１年	米倉　晴飛
帯広市光南小	１年	菅原　迪音
教育大学附属旭川小	２年	佐々木建主郎
苫小牧市若草小	２年	田嶋　　匠
浜頓別町浜頓別小	２年	山本　千夏
留萌市留萌小	１年	鳥谷内芽衣
室蘭市八丁平小	１年	熊谷　美輝
札幌市琴似小	１年	冨田　弦暉
室蘭市天神小	１年	福士　　都

小学校（中学年）の部

室蘭市蘭北小	３年	佐藤弘日慎
苫小牧市ウトナイ小	３年	浜野　正太
旭川市忠和小	４年	林　　澪那
留萌市東光小	４年	八幡　一樺
室蘭市地球岬小	４年	川又　美由
旭川市忠和小	４年	秋山　結菜
室蘭市蘭北小	４年	坂元あさひ
士別市温根別小	３年	宍戸　快向
留萌市緑丘小	４年	野上　　音
東神楽町志比内小	３年	中村　　曜
帯広市明和小	３年	芦谷　和花
室蘭市旭ヶ丘小	３年	太田　怜愛
札幌市清田南小	３年	田島　敬仁
苫小牧市拓勇小	４年	京極　聖空
帯広市帯広小	３年	須田　陽暖
室蘭市蘭北小	３年	石原　陽琉
函館市鍛神小	４年	長谷川裕真
新冠町新冠小	３年	小笠原聡介
室蘭市蘭北小	４年	田邊みわこ
幕別町札内南小	４年	福田　麻里

小学校（高学年）の部

函館市旭岡小	６年	武井　咲來
室蘭市天神小	５年	南川瑛大朗
函館市北美原小	６年	有金　萌咲
札幌市新川中央小	５年	山田　うみ
旭川市緑が丘小	５年	野口　　愛
室蘭市蘭北小	６年	佐藤弘之介
室蘭市蘭北小	６年	山田　芽依
札幌市美香保小	６年	田中　絢萌
小樽市稲穂小	５年	小泉　紀歩
函館市大森浜小	６年	山口　　悠
室蘭市海陽小	５年	斉藤　灯里
深川市一已小	５年	安居小優莉
岩見沢市南小	５年	長江　理仁
室蘭市旭ヶ丘小	５年	西川　美緒
新冠町新冠小	５年	小笠原　結
函館市中島小	５年	大和田さくら
室蘭市旭ヶ丘小	５年	太田　悠翔
士別市士別小	６年	斉藤　舞澪
士別市士別小	５年	斉藤　慶親
留萌市緑丘小	６年	野上　　詩

中学校の部

遺愛女子中	１年	工藤日花詩
遺愛女子中	３年	上坂　桜瑞
北斗市浜分中	１年	小箱　都乃
上富良野町上富良野中	２年	菊池　瑛太
室蘭市本室蘭中	２年	山田つぐみ
室蘭市港北中	１年	田邊ももこ
札幌市光陽中	１年	小田萌百花
藤女子中	１年	豊沢　峰々
室蘭市港北中	３年	工藤　維華
岩見沢市豊中	２年	佐藤　柑乃
岩見沢市光陵中	１年	髙田　清乃
遺愛女子中	２年	瀬尾奈津希
遺愛女子中	３年	奥村　花菜
留萌市留萌中	３年	三浦　璃子
小樽市松ヶ枝中	２年	山本　博文
小樽市松ヶ枝中	２年	佐々木悠凪
美幌町美幌中	３年	山口　遙凜
美唄市美唄中	３年	手塚裕姫乃
美唄市美唄中	３年	壽盛　空大
美唄市美唄中	３年	小川　未羽
苫小牧市開成中	１年	對馬　羽菜
札幌市厚別北中	３年	佐々木　碧
遺愛女子中	３年	赤澤　里緒
滝川市明苑中	１年	片桐　和楓

高等学校の部

帯広緑陽高	３年	川端　華音
帯広緑陽高	３年	丹治ひなの
旭川志峯高	２年	荒尾　京香
旭川志峯高	２年	石村　優登
士別翔雲高	１年	髙橋　穂実
士別翔雲高	１年	髙橋　柚羽
旭川実業高	１年	松橋　伶音
帯広柏葉高	２年	中村　柚葉
室蘭清水丘高	３年	佐藤　結彩
帯広柏葉高	１年	岩田　百子
釧路湖陵高	２年	眞野ことね
札幌聖心女子学院高	３年	田中　佐和
旭川藤星高	２年	村山　花恋
帯広三条高	１年	和田　幸紗
帯広柏葉高	１年	大玉日華里
遺愛女子高	１年	柳川　桜子

全道研究部長会から

帯広・十勝大会の準備が進む！

北海道学校図書館協会　総務部長　**村　山　知　成**

北海道学校図書館協会第61回全道研究部長会が９月14日（土）、15日（日）の両日、札幌市中央区のかでる２・７で行われた。

１日目の前半には、2025年10月に開催が予定されている北海道学校図書館研究大会帯広・十勝大会の大まかな概要が帯広市学校公共図書館研究会の鈴木会長および稲見研究部長（十勝学校図書館サークル研究部長も兼務）より報告された。予算面の観点から、開会式・全体会はオンデマンド（事前からの配信）で行うことや、開催要項や指導案・提言、各種資料および大会収録を電子化して大会参加者に提供される予定であることが報告された。また運営面での負担を軽減するために、１日目の昼食提供や貸切アクセスバスを準備しないこともあわせて報告された。令和７年１月の全道研究部長会では、より詳細な内容が報告されることが確認された。

２日目の後半には、道内各支部からの活動状況の報告が行われた。札幌支部の安部先生・和田先生からは、７月に開催された「学校図書館クリニック」での図書館司書の参加態勢の問題が報告された。函館支部の加茂先生からは、児童・生徒の電子書籍閲覧の問題が取り上げられた。電子書籍の使用が増えると結果的に予算を使い切ってしまうことから、本来充足させたい児童書の購入が狭まり、その結果図書充足率を守るため、廃棄を抑えざるを得ない問題が生じてしまう現状が報告された。空知地区の古関先生からは、８月に開催された空知学校図書館協議会学習会の様子などが報告された。昨年研究大会を終えた苫小牧支部からは菅原研究部長が参加、協会の構成メンバーが高齢化し世代交代の必要性が急務であることを述べていた。旭川支部の吉井先生からは、学校図書館運営マニュアルの配付追録作業に奔走している現況が報告された。道内各支部の先生方が、学校図書館活動の更なる発展に尽力していることにが強く再認識させられた２日間であった。

第44回全国学校図書館研究大会高松大会に参加して

学校図書館が中心になって新聞活用を推進

札幌市立屯田北中学校　学校司書　児　玉　優　子

６年ぶりに対面で開催された全国大会。現地に赴いて参加するのは初めてでしたので、その規模や学び合いの熱気、そして学校図書館に携わる方々との語らいに心躍る２日間でした。特に、「学校図書館活用とICT活用」（中学校）の分科会では、「本」と「ICT」のそれぞれの良さを生かした各教科の授業実践が多数紹介され、国語と理科、音楽と美術といった教科横断や、全教科での探究学習を推進する学校図書館の姿に大変刺激を受けました。学校全体で組織的に取り組んでいることに羨ましさを感じながらも、ICTに偏ることなく本を効果的に活用して深く調べる授業のあり方に、一人一台端末時代の学校図書館の可能性を感じた分科会でした。

また、司会を務めた高校の分科会では、学校図書館への興味関心を高めるための、生徒の取り組みや授業実践について発表されました。図書委員による「読書新聞」や、おすすめ本アンケートを集計して作成した「本棚ポスター」、本の楽しさを伝える「シェア型図書館」など、アイデアに富んだ活動で、中学校でも挑戦したくなるものばかりでした。

そして、今回の高松大会では発表する機会をいただき、「学校図書館から広がるNIE」と題して、学校図書館が中心になって新聞活用を推進していくために、学校司書として取り組んできた実践を発表。参加された方々と「どんな取り組みから始めると効果的か」「新聞クイズをどう作成するか」「新聞の保存期間はどれくらいか」などの話題で交流し、普段から気になっていたことがスッキリできたと感想をいただきました。発表に際し、北海道新聞社みらい教育推進室から提供された実践報告書や新聞等を配付し、北海道各地の新聞活用の実践も全国に発信しました。身近で持続可能な取り組みとして、参加された方々の活動のヒントにつながれば嬉しく思います。

次回は2026年８月の札幌大会です。今度は運営の裏方として、参加される皆さまにとって心躍る大会となるよう準備したいと思っています。

第44回全国学校図書館研究大会高松大会に参加して

市民活動とつながる学校図書館

札幌市立光陽中学校・星置中学校　学校司書　浅　村　麻姫子

久しぶりの会同の全国大会。会場の「サンポール徳島」は快適な施設で、連日35度を超える猛暑の中でも困難なく大会に参加することができました。

会同開催２日日程（分科会30）は、申し込み時にはコンパクトな印象を受けました。大会当日、ずらりと並んだ受付ブースに多くの受付係の方がおり、手厚い「お出迎え」感に驚きました。また、開会式での香川県知事と高松市長の実のある温かなご挨拶、どの分科会も運営スタッフが十分に配置され滞りなく運営されていたことも印象的でした。

私は「市民団体と連携して取り組む学校図書館の展示～りぶ＊さぽ（さっぽろ学校司書友の会）とsapporo・チャイルド・ライツプロジェクト～」の題で実践を発表しました。学校司書界のレジェンド、山形県の五十嵐絹子さんと同じ分科会です。とても光栄で、かつ身の引き締まる思いでした。五十嵐さんは「市民とともに歩んだ鶴岡の学校図書館」と題し、学校司書配置の草分けである山形県鶴岡市の学校司書配置が力強い市民活動の賜物であること、しかしその一方で現在学校司書の待遇が後退していて、いまだに市民活動が必要である現実を話されました。あの鶴岡でさえ後退！？と衝撃を受けました。

全国大会の楽しみと言えば、著名な方の講演が聞けること。大ホールのステージをエネルギッシュに動き回りながら楽しいお話をされた記念講演の茂木健一郎氏、しっとりと語られた山根基世氏。心が満たされる、充実した時間となりました。

大会後に視聴できたオンデマンド配信は19本。対面開催の分科会と合わせると、まずまずのボリュームと感じました。中学校の研究発表、文科省の図書館施策、国立国会図書館の学校図書館支援など、幅広く視聴しました。

次の全国大会は、いよいよ2年後の札幌大会となりました。大会運営委員会の一員として準備に携わっています。高松大会での学びを生かし、全道の皆さんと一緒に大会の成功に向けて進みたいと思います。どうぞ皆様のお力をお寄せください。よろしくお願いいたします。

学校図書館情報

◆第52回HBC中学生作文コンクール審査終了

各地区からの作品応募や審査協力をいただきましてありがとうございました。今回のコンクールでは「20××年、何してる？」をテーマに、未来に思いを馳せながら表現した作品が寄せられました。

【表彰式の予定】※各日30分前集合
中央表彰式、札幌・道央地区：１月７日（火）13時開催
　　北洋大通センター４階 セミナーホール
道北地区：１月８日（水）13時開催
　　旭川北洋ビル８階　小ホール
道南地区：１月10日（金）13時開催
　　函館北洋ビル８階　ホール
日胆地区：１月11日（土）13時開催
　　室蘭プリンスホテル４階 桃山の間
道東地区：１月14日（火）13時開催
　　北洋銀行釧路中央支店３階　会議室

◆第57回北海道学校図書館研修講座へのご参加を

・１月７日（火）～８日（水）２日間日程
　北海道立道民活動センター（かでる２・７）
　　７日（火）開講式・全体講演・選択講座・指導者研修講座
　　８日（水）校種別選択講座（討議）・指導者研修講座・閉講式
・講演：「GIGAスクール時代の学校図書館
　　～ベストミックスによる機能強化と学びの充実～」
　講師：全国SLA理事長　野口 武悟 氏
・参加費：3,500円
　　講演のみ参加　1,000円
　　１日のみ参加　2,000円
・申込：12月１日（日）～ 18日（水）の期間にイベント申込サービスPeatixにて。

詳細は要項（HPにも掲載）をご覧ください。たくさんのご参加をお待ちしています。（１日目終了後、本の話や図書館の悩みなどを気軽に話し合える機会として、懇親会も予定しております。）

◆第55回「学校図書館賞」にご応募を！

本賞は学校図書館に関する運動の部（学校図書館運動の推進）、論文の部（学校図書館に関する著作・論文）、実践の部（学校図書館の実践活動）の三部に分けて授賞されます。詳しくは全国SLAのHPをご覧ください。
応募期間2024年10月15日～ 2025年１月31日

◆「北海道の読書」の販売拡大の取組を

前号機関紙327号の発送に合わせて、読書感想文コンクール作品集「北海道の読書」の申込チラシをお送りしています。各学校で印刷をして各家庭に案内していただけますよう働きかけをお願いいたします。今年度より、全校種の作品が1冊にまとまりました。

事 務 局

事務局長　山　口　朱　美（札幌市立山の手小学校教頭）
事務局校　札幌市立山の手小学校
〒063-0835　札幌市西区山の手5条6丁目1-1
TEL 011-621-0439　FAX 011-613-1957

Amenity
B-Coat

本の破損や汚れを防ぎながら、抗菌効果を発揮するブックカバー「アメニティＢコート」ポリプロピレンフィルムのため、燃焼時にも塩素ガスなど有害物質が発生せず、安心です。ご指定の上ご愛用下さい。

キハラ株式会社
〒062-0035 札幌市豊平区西岡5条3丁目8-15
ＴＥＬ （011）857－3331
ＦＡＸ （011）857－5211

◆ 新刊紹介

『エポエポアヤポ　アイヌ文学読本』

著　者：トッカリ
ISBN：978-4-901336-42-0
価　格：1,650円（税込）
発　行：のんびり出版社
　　海豹舎
発　売：いい旅書房
　　オンラインショップ送料込み１冊1,771円
発行日：2023年10月25日

「知里幸恵の真実の愛としびれるアイノ文学21冊」アイヌのことばで書かれた文学作品を紹介し、アイヌ文化と言語の魅力を伝えるためのアンソロジーである。編集者トッカリは、選りすぐりのアイヌ語の物語・詩・歌を集め、それらを現代の読者にも理解できる形で編纂している。

アイヌ文化への敬意と理解を深めるための一冊。

編 集 後 記

本号は第70回青少年読書感想文全道コンクールの特集号です。今年も全道各地からたくさんの力作が届き審査員を悩ませました。保護者の皆様や学校関係者をはじめご指導に当たられた皆様に感謝いたします。これからも多くの子どもたちが主体的に本を読み、心に沸き起こる感動を言葉で表現できるような活動を進めていただけますようお願いいたします。

（編集：村山　知成　野村　邦重
　　大久保　雅人　山口　朱美）

ホームページアドレス
https://hokkaido.sla.gr.jp